

家庭

スモークバーレーでは高齢者も多く見かける。私が出会った最高齢のグレゴリオさん(76)は、気温が高くない午前中、毎日働きに出る。偶然カメラを向けたノニータさん(63)が話しかけてきた。女性と子どもを支援する自治組織のリーダーだ。「私はもう年寄りだから、いいんです。でも、子どもたちを見て、

学校にも行けず、毎日汗水流しているのよ。親に仕事がないから、生活を手助けするために仕方ないんです」同じ話を入り口のチェックポイントの管理人からも聞いた。「仕事がないのが問題」と。しかし、在フィリピン7年目、ケイスワーカーとして働く伊藤洋子さん(31)の話は違っていた。「フィリ



仕事の合間に、ちょっと一休み＝フィリピンで

太平洋越え「食えない構造」

ピンの貧困は、農地改革がうまくいかなかったのが原因です。田舎で自給自足できないから都会に出てくる。でも、ここで貧困の問題を真剣に考えたら生きていきません。みんな、楽しくやっています。つらさを笑い飛ばそうとしています。笑顔には、背景があるんです」

私はそのとき、中米の小国ニカラグアのことを思った。94年、初めてゴミ捨て場に足を踏み入れたのが、この国だ。

タガログ語と英語が中心のフィリピンだが、数字や曜日などに、スペイン語が根強く残っている。そして、ノニータさんがタガログ語で説明してくれた「バハラナ プラス」(気にせず、あしたやればいいよ)という生活感覚は、まさにラテンアメリカ的だ。

「食えない構造」も、ラテン気質も、太平洋を越えてつながっているのではないか。

(フォトジャーナリスト)

宇田 有三

